

蛍光眼底造影ケーススタディ エキスパートはFA・IA・OCTAをこう読み解く

飯田 知弘 編

昨今の眼底画像診断の主流といえば、非侵襲的かつ短時間で行うことのできるOCTもしくはOCTアンギオグラフィであろう。その分臨床の場で、蛍光眼底造影検査が行われる頻度が減ってきているのは間違いない。しかしながら、たとえ短所があろうとも、蛍光眼底造影検査で得られる情報量は多く、動的な血液循環や血液網膜関門の破綻の有無などは、造影剤を用いないと把握できない。すなわち蛍光眼底造影は、少なくとも今の時点ではまだ、他で補完することのできない必須の眼科検査なのである。

本書を読むと、そのような蛍光眼底造影検査の意義がありありと伝わってくる。本書は、『臨床眼科』誌で2016年から約2年間にわたって連載されていた「蛍光眼底造影クリニカルカンファレンス」を土台に、OCTアンギオグラフィなどの最新の情報を加えて出版されたもので、総論と25の眼底疾患を詳述した各論から成っている。

編者の飯田知弘先生は、今の時代に必要な蛍光眼底造影を、系統立って学ぶことのできる書籍をめざされたとのことだが、なるほど蛍光眼底造影の基礎から始まってはいるものの、眼底やOCTと蛍光眼底造影所見との対比に多くの分量が割かれており、病態の正確な把握のために必要な説明が丁寧になされている。蛍光眼底造影はmultimodal imagingのツールの一つとしての位置付けなので、読影に不慣れな読者にもとつきやすい構成であるといえる。

内容としては、糖尿病網膜症や加齢黄斑変性など網膜～脈絡膜の主要疾患から、ぶどう膜炎や腫瘍に至るまで、造影検査が有用と考えられる疾患群が十分に網羅されている。特筆すべきは、本書のタイトルにもあるケーススタディの項である。これが実臨床に即していてわかりやすい。疾患ごとに複数の症例が提示され、画像所見とその解釈、治療の考え方が記載されている。例えば慢性中心性漿液性脈絡網膜症の項では、(1) 蛍光漏出部位が特定不能な例、(2) 脈絡膜血管透過性亢進が著明な例、(3) 広範囲のRPE変性萎縮を示す例、をはじめとして、実臨床で遭遇しそうな、かつ画像検査の解釈に悩みそうな6症例が提示されている。疾患ごとに、「押さえておきたい読影ポイント」と、「バリエーションとピットフォール」の項目もあり、読者にとっては至れり尽くせりである。

各項目を担当された執筆者の画像診断にかける熱意が伝わる力作であり、眼底画像診断アトラスとしても手元に置いておきたい一冊となっている。本書の豊富な蛍光眼底造影画像を通じて、OCTやOCTアンギオグラフィ所見の解釈まで容易になることは間違いない。

兵庫医大主任教授・眼科学
五味 文

B5・頁312 2019年4月
定価：本体9,000円＋税
[ISBN978-4-260-03841-6] 医学書院刊